

文学博士
的研究——
対する授業

日本漢字音の研究
は、中国の音韻史や
刊本等であった。一
ままの筆跡が現存し
日本漢字音を表記し
しているが、その大
つて、閲覧が容易で
極く稀であった。沼
東寺など、古寺の経
に関する新資料を登
ら個別的な論考を集
就ての研究』がある
めたのが、本書『口
つて——』（汲古書

には、時代性・方言性等に亘りて、従来のような、韻書等に基き、系性を認めることが出来ず、
いる。そして、従来、仏書
中にも「漢音」の要素が混
の要素が含まれていること
「漢音・新漢音論」では、
の体系と基本的に同一であ
より後の唐の慧琳（七三七
で「秦音」と称せられるも
とする、近時の説を踏ま
「長承本蒙求」（九五〇年頃
れていると認め、その字音の
を施した。更に「新漢音」
「漢音」の一類と見られて来
して論ぜられて来たのに対
三七年加号）や「胎藏界自
時代一、一、二世紀の天台
「勝・行・明・十」など、こ
めて指摘し、それら古資料

中で最も夙い時期
等の資料群について

この他、「宋音・

法」(一五六八—二

分韻表の提示を行

の「ホフ」が、無声

の形の促音に転ず

って、一一世紀か

以上、本書の主

及び梵字音資料と

これによって、日

献によって具体的

役割を果たしたこと

紐分韻表を作成し

は、今後の漢字音

尚、江戸時代の

においては、古代

の誤が指摘される

代の字音の用例を